

7. 京田辺市堀切古墳群の再検討（5）

諫早 直人・守田 悠・池田野々花
横白 彩江・菱田 哲郎・繰納 民之

1. はじめに

堀切古墳群は、京田辺市新堀切谷・里ノ内に位置する古墳時代後期の群集墳である。甘南備山（標高 221m）の山麓から北東方向にのびる東西 2 つの丘陵上、約 0.4km 四方の範囲に、消滅したものを含め 11 基の円墳（横穴式石室墳）と 10 基の横穴墓がこれまでに確認されている（本書第Ⅲ部第 6 章：図 1）。京都府立大学文学部考古学研究室では数年来、京田辺市史編さん事業の一環で、堀切古墳群出土遺物の再整理作業をおこない、堀切古墳群の再検討を進めている（田口ほか 2020、諫早ほか 2021、岡田ほか 2021）。本稿では田辺町教育委員会による 1978～1979 年の調査の際に堀切 9 号墳、10 号横穴墓などから出土した遺物についての調査成果を報告する。（諫早直人）

2. 堀切 9 号墳出土遺物

1978 年、薪小学校の建設を契機に発掘調査がおこなわれ、現在は消滅している古墳である。墳丘は調査時点で西側に張り出した尾根を除き砂防工事で削り取られ半壊状態であったが、トレンチ内の落ち込みを墳丘裾として径 20 m の円墳と想定されている。埋葬施設は西に開口する横穴式石室であるが、調査時点では石室に用いられた花崗岩の石材は大部分が抜き取られ、羨道部の三個と玄室内の一個を残すのみであった。石材の抜き取り穴から石室全長 5.2m 以上、

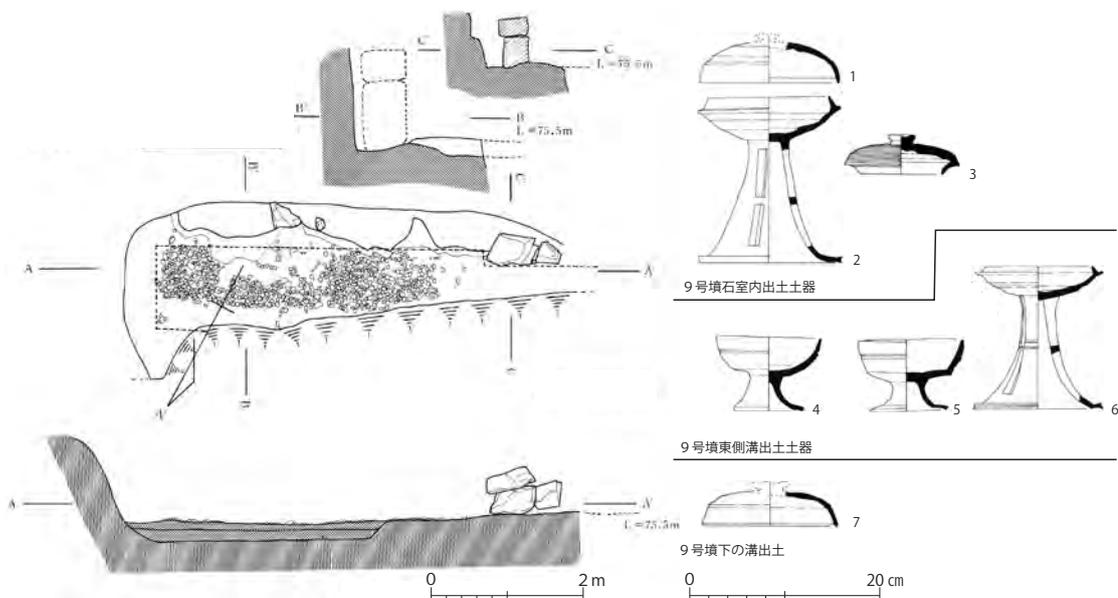


図 1 堀切 9 号墳と出土遺物（石室：S=1/100、遺物：S=1/80）

（田辺町教育委員会 1989 を一部改変）

両袖式である可能性が指摘されている（図1）。玄室の床面は半分が砂防工事ですでに削り取られていたが、全面に1～5cm程度の河原石を用いた敷石が確認された。一方、羨道の床面は地山を削り出すのみで敷石をもたず、これによって玄室長3.5m、羨道部長1.7mに復元されている。玄室中央部から羨道部側の敷石には赤色顔料が付着していた。また、石室の石材に混じって板状の石片が数点確認されており、組合式石棺の存在が想定される。

遺物は玄室奥壁右部分から須恵器蓋片・ガラス小玉2点、左部分から鉄片、中央部と奥壁部より耳環、羨道部側より鉄刀・須恵器高杯が敷石上から、敷石下の土砂からガラス小玉3点の出土が報告されている。これらは石材の抜き取り時の攪乱と砂防工事により原位置を保っていないと思われる。他に、東斜面の溝状地形から9号墳から流出したと思われる須恵器高杯（図1-4～7）が報告されている（田辺町教育委員会1989）。時期は陶邑編年のTK43～TK209型式併行期に位置づけられる（岡田・池田2021）。（守田悠）

（2）鉄刀（図2-1～7、写真4-1～7）

鉄刀が破片を含め5点、刀装具が2点出土している。1は短い刀で、茎部の大部分を欠損しており関は明瞭には確認できない。刃に僅かであるが長さ3cmほどの範囲で横方向の木質が付着している。2は茎部と考えられるが、目釘孔や木質は確認できない。1の折損部よりも幅が広がっているため、別個体のものである可能性が高い。3～5は鉄刀片で劣化の様子が似ており同一の個体である可能性が高いが、最大幅が3.3cmであり、1の幅が2.9cmであることと刀身がほぼ完存していることを踏まえると、これらが1と同じ個体であるとは言い難く、2と組み合う可能性が高い。6は鏝である。象嵌や透かしは確認できなかった。7は鍬である。鍬は鏝を伴う鉄刀に付随するもので、大きさからも6と組み合うものであろう。鏝を伴う鉄刀は全長が40cmを超える場合がほとんどであり（豊島2001）、大型の鉄刀が副葬されていたと想定できることから、先述した破片の大きさも踏まえると、刀装具も2に伴うものである可能性が高い。なお、象嵌や透かしをもたない鏝は比較的容易に生産ができると考えられ、在地生産がおこなわれていたことが想定される（豊島2001）。

（3）刀子（図2-8、写真4-8）

刀子片が1点出土している。8は刃部片で、残存長3.1cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm、重さ9.2gをはかる。表面全体に横方向の木質が付着しており、木製の鞘であったと考えられる。

（池田野々花）

（4）耳環（図2-9・10、写真4-9・10）

形態の異なる2点の銀製耳環が出土している。9は直径2.1cm、太さ3.0～3.5mmの断面略円形、重さ3.8gである。報告者は「鍍金がはげ落ちてしまったのか、銅の地肌が露出している」とするが（田辺町教育委員会1989:30）、蛍光X線分析の結果によれば、銀製で表面に鍍金をしていた可能性が高い（本書第Ⅲ部第8章参照）。肉眼観察による限り、裏面に製作時に由来するとみられる筋状の痕跡が幾筋も認められる。10は直径1.7cm、太さ1.6mmの断面円形、重さ

表1 堀切9号墳出土鉄刀・刀装具計測表

番号	部位	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	刃	24.2	2.9	1.0	290.4
2	茎	8.4	1.9	0.5	42.1
3	鉄刀片	7.4	※3.3	※0.5	32.7
4	刃	7.8	※3.0	※1.3	46.8
5	刃	4.0	※2.3	※0.8	14.4
6	鏝	2.6	1.0	0.4	4.3
7	鍬	7.1	2.4	0.8	38.7

※は残存の値

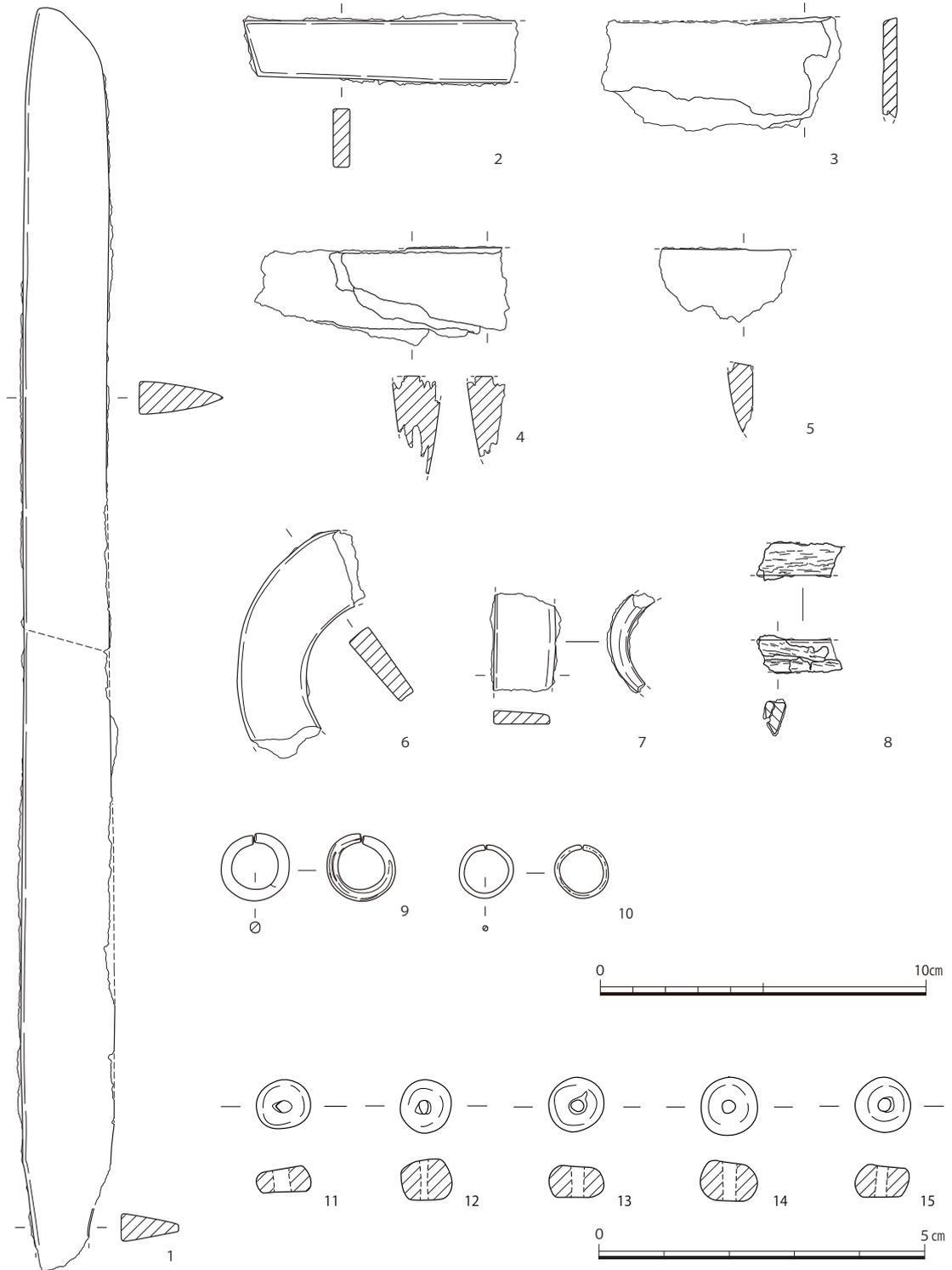


図2 堀切9号墳出土遺物 (1～10：S=1/2、11～15：S=1/1)

0.7gである。蛍光X線分析の結果によれば銀製で、9とは異なり表面に鍍金をしていた形跡は認められなかったとのことである。やはり裏面には製作時に由来するとみられる筋状の痕跡が幾筋も認められる。(諫早)

(4) ガラス小玉 (図2-11～15、写真4-11～15、表2)

ガラス小玉は5点出土している。すべて直径が0.69～0.85cmの大型品である。

表2 堀切9号墳出土ガラス小玉計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色調	製作技法	備考
11	0.81	0.69	0.41	0.25	0.33	紺色透明	引き伸ばし法	青味の強い紺色透明、列点状の気泡（内部に比較的大きな気泡も見られる）
12	0.81	0.77	0.67	0.19	0.58	紺色透明	引き伸ばし法	濃紺色、筋状の気泡
13	0.80	0.80	0.49	0.14	0.46	紺色透明	引き伸ばし法	濃紺色、列点状の気泡
14	0.85	0.85	0.61	0.17	0.71	紺色透明	引き伸ばし法	表面全体に細かいヒビが見られる、透明感乏しい
15	0.83	0.80	0.48	0.18	0.50	紺色透明	引き伸ばし法	濃紺色、列点状の気泡

※計測には最小読み取り値0.1mmのデジタルノギスを使用。

いずれも紺色透明を呈し、11は他4点に比べやや青味が強い。11は両端面に明瞭な研磨が認められる。直径に比して孔径が大きく、厚みの薄い楕円形をなす。12は加熱整形による端面の丸味を残しており、研磨は認められない。13は扁平な形状を呈しており、12と同様に端面は加熱整形により丸味を帯びている。14は風化が激しく、表面全体に細かいヒビが見られる。15は断面形が平行四辺形状をなしており、さらに孔が斜めに伸びている。5点とも孔に対して平行な気泡列または気泡筋が認められる点、孔壁面が平滑である点から、引き伸ばしたガラス管を分割して小玉を製作する「引き伸ばし法」で製作されたと考えられ、15に見られる斜めに伸びる孔は、ガラス管を引き伸ばす際、主軸に対してやや斜め方向に引き伸ばされた痕跡と理解できる。

また、これらの5点のガラス小玉については今回、理化学的な手法による材質調査がおこなわれている（本書第Ⅲ部第8章参照）。概要のみ述べると、11のみ中アルミナタイプのカリガラス（Group PI）（Oga and Tamura 2013）、他4点は植物灰タイプのソーダガラス（Group IIIIB）であった。後者は古墳時代中期後半以降、大量に流通する。4点とも端面に丸味を残していることから、流入から副葬までの間にそれほど時間が経過していないことが想定される。一方、前者は中期前半までに流入する種類のガラス小玉である。他4点とは異なり11のみ明瞭に研磨されていることから、流入から副葬までに一定の時間経過が見込まれる。

（横白彩江）

3. 堀切10号横穴墓出土遺物

（1）古墳の概要

9号墳同様、薪小学校の建設に伴い調査され、現在は消滅している。調査時点で天井部はなく、玄室内は流土で埋まっていた。流土中から遺物の検出はなく、埋没時期は不明である。玄室と羨道部の明確な区別はないものの、平面は隅丸長方形、残存長3.3m、奥壁幅1.65mをはかり、立面形はアーチ形と推定される。床面は奥壁から羨道部に向かって低く傾斜する（図3）。中軸線中央やや羨道部よりに直径20cmの赤色顔料が付着した石材が出土している。

他の横穴墓より比較的多くの遺物が出土しており、遺構図面と調査写真からある程度遺物の配置と横穴の利用面が復元できる。以下、簡単に整理していきたい。

まず、報告には土師器甕1点、土師器長頸壺1点、須恵器高杯1点、須恵器杯3点、須恵器蓋2点、須恵器高杯片1点、鈿帯金具（一部）、鉄片2点、鉄釘10点、人骨2個体が記載されている。そのうち中軸線の左側から須恵器杯2点と土師器甕と鉄釘、右側からその他が出土し、人骨2体は中軸線より右側に頭を奥壁側にして2体並んだ状態で出土しているという。

遺構図面と写真史料から推定される遺構面と遺物の配置を図4に示した。少なくとも初葬

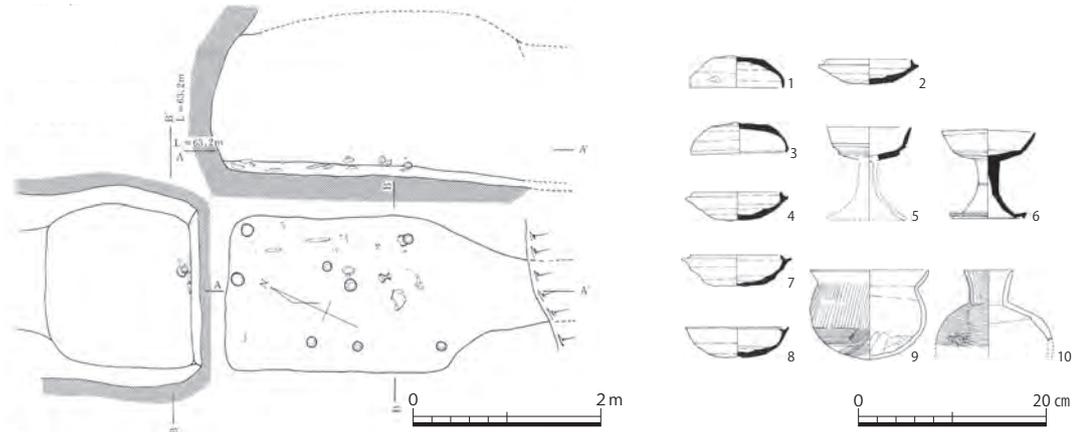


図3 堀切10号横穴墓と出土遺物（横穴：S=1/100、土器：S=1/80）

として床面直上の一人ないしは二人の人物が葬られ、その後左側に追葬がおこなわれたと考えられる。（守田）

(2) 土器の評価

報告書では、10号横穴墓の出土土器として、土師器甕1点、土師器長頸壺1点、須恵器高杯1点、須恵器杯3点、須恵器蓋2点、須恵器高杯片1点が挙げられている。このうち土師器長頸壺（図3-10）は、球形の体部を作った後に上部を塞ぎ、中心からずれたところに短い口頸部を付けて作られており（写真1・2）、須恵器平瓶の形状と作り方が一致する。ただし精良な胎土で赤褐色を呈し、また口頸部と体部にヘラ磨きを施すという点から、焼成不良の須恵器ではなく、土師器として作られたことは間違いない。須恵器生産と土師器生産との交錯を示す重要な事例として評価できる。この10号横穴墓の出土土器は数が多いうえ、蓋杯にもまとまりがあり、一括性が高いと判断できる。蓋杯や高杯の形態から飛鳥Ⅱに併行すると想定でき、7世紀中葉の年代を与えることができる。土師器の甕や平瓶もこの時期とみて問題ない。近くの横穴墓群である八幡市女坂・荒坂横穴墓群や松井横穴墓群においても、多数の須恵器供膳具に少数の土師器貯蔵具を含むセットが一括で副葬される事例が多く確認されており、習俗としての共通性を見出すことが可能である。（菱田哲郎）

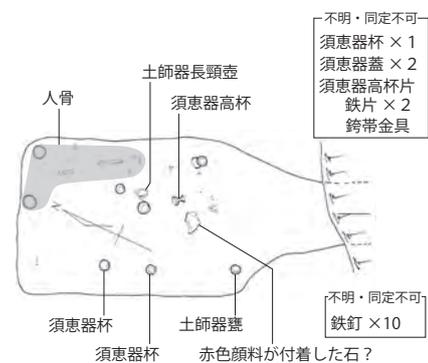


図4 堀切10号横穴墓遺物出土状況



写真1 土師器長頸壺 内面



写真2 土師器長頸壺

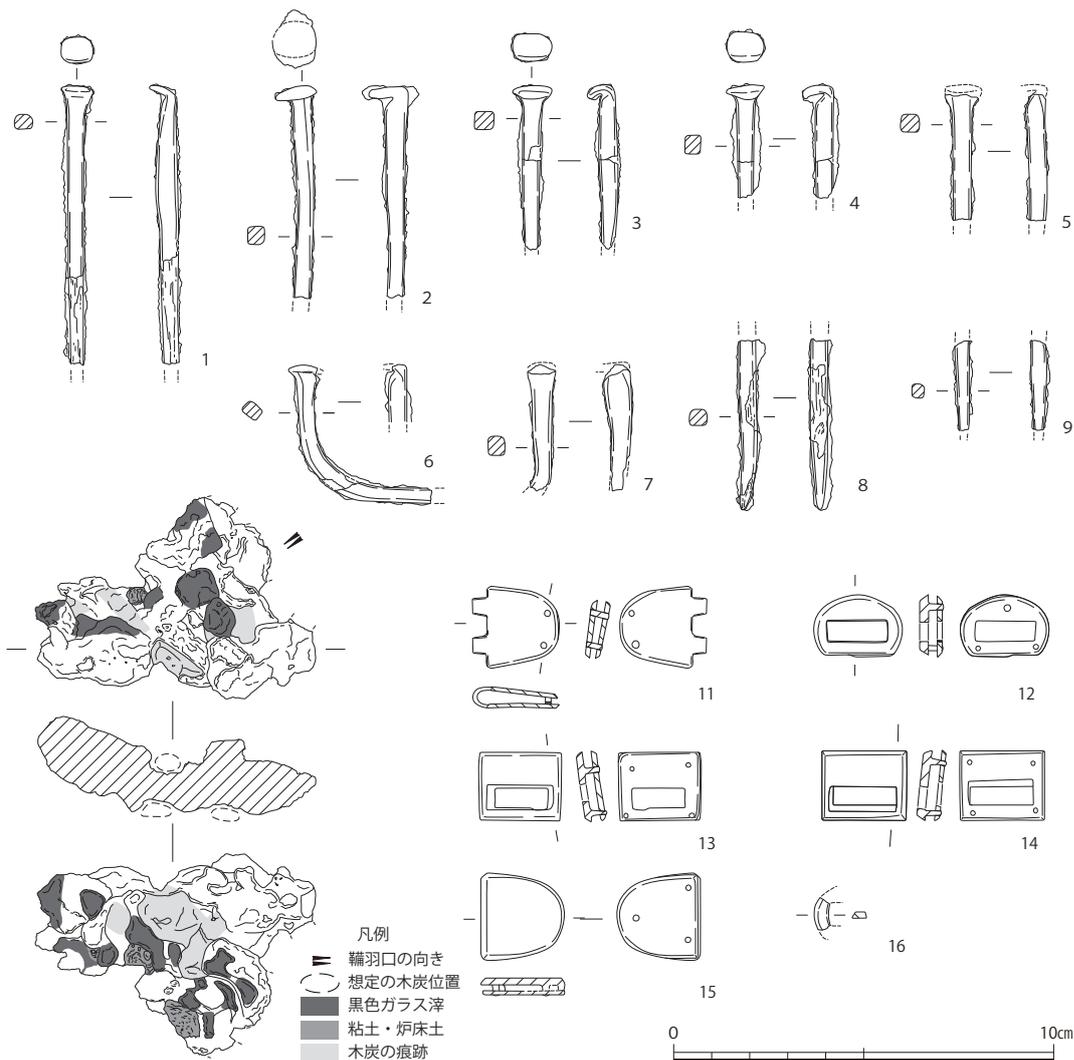


図5 堀切10号横穴墓出土遺物 (S=1/2)

(3) 鉄釘 (図5-1～9、写真4-16～24、表3)

報告書では10点と記載があるが(田辺町教育委員会1989)、今回、確認することができたのは9点である。「堀切9号墳 横穴10」と「堀切10号墳」という2種類の注記がみられるが、堀切9号墳から鉄釘が出土した記録はない。調査記録によると堀切9号墳が1989年3月2～27日、堀切10号横穴墓が1989年2月20日～3月中旬頃に発掘されており、ラベルの書き間違えが起きた可能性もある。また、堀切10号墳の埋葬施設は未調査で遺物も報告されていない。これらの鉄釘の形態が非常に似ていることから、堀切10号横穴墓から一括して出土したとみてよいだろう。

表3 堀切10号横穴墓出土鉄釘計測表

番号	残存長(cm)	体部厚(cm)	重量(g)	木質	頭部形態
1	7.4	0.45×0.5	5.4	A	折曲a
2	5.6	0.45×0.45	3.9	A?	折曲a
3	4.4	0.5×0.5	2.3	-	折曲a
4	3.1	0.5×0.4	2.0	-	折曲a
5	3.3	0.5×0.45	1.9	A?	折曲a?
6	5.7	0.35×0.4	2.7	-	折曲a
7	3.3	0.45×0.5	2.5	-	折曲a?
8	4.5	0.5×0.45	2.5	A	-
9	2.3	0.35×0.4	0.7	-	-

鉄釘はいずれも頭部か先端部を欠き、全長のわかる資料はない。頭部が判別できる資料は7点あり、すべて頭部を叩き潰した後、折り曲げるタイプである。1は最も残存長が長く、

7.4cmをはかる。先端部を欠き、頭部より2.7cm以下に縦方向の木質が遺存する。2は残存長5.6cmをはかる。先端部を欠き、下部にわずかに有機質のような痕跡があるが、判別できない。3は残存長4.4cm、4は残存長3.1cmをはかる。いずれも先端部を欠き、有機質は遺存しない。5は残存長3.3cm、頭部の折り曲げ部分と先端部を欠き、頭部より2.2cm以下に木目方向が不明瞭な木質が遺存する。6は残存長約5.5cmをはかる。頭部の一部と先端部を欠き、ほぼ直角に折れ曲がる。7は残存長3.3cmをはかる。折り曲げ部分と先端部を欠き、有機質は遺存しない。8は残存長4.5cm、頭部を欠き、身部から先端部にかけて縦方向の木質が遺存する。9は残存長2.3cm、頭部と先端部を欠き、かすかに横方向の木目が遺存する。

以上の鉄釘9点は頭部形態から平井洗史分類の折曲aに相当する(平井2021)。全長のわかるものはないが、概ね同時期の八幡市女谷・荒坂横穴墓群、京田辺市宮ノ口2号墳から折曲げた頭部をもつ全長8～10cmの鉄釘が出土しており、堀切10号横穴墓の鉄釘も全長は10cm程度と推測される。女谷・荒坂横穴墓の例からみて、木棺に伴うものとみてよいだろう。木質は頭部側に横方向の繊維方向で木質が付着し、先端側で縦方向の木質が付着する岡林孝作分類のA類にあたるものが数点確認できたが(岡林1995)、木材厚や木棺の復元に関する有効な指標は確認できなかった。10号横穴墓の初葬が奥壁方向に頭を向け並列した中軸より右側で確認された人骨とすると、左側から出土した釘は追葬に釘を用いた木棺が使われたものと考えられる。後述する銚帯金具も8世紀前半という年代から追葬に伴うものとみられるが、女谷・荒坂横穴墓群のように周辺の横穴墓でも7世紀代の埋葬に鉄釘と当該期の須恵器が共伴する事例が多い。10号横穴墓では、釘を用いた木棺による埋葬と、銚帯金具を伴う埋葬の、少なくとも2回の追葬がおこなわれた可能性が高い。(守田)

(3) 鉄滓(図5-10、写真4-25)

全長7.3cm、厚さ1.8cm、重さ67.1gをはかる。炉底の形状を反映した椀型鍛冶滓で、裏面には炉底の粘土が付着している。表面には鞆羽口が融解した黒色ガラス滓が集中する箇所があり、鞆羽口が図面右上に設置されていたと想定できる。一つの塊というより粒状の滓が集合したような形状になっており凹凸が激しく厚さが均一ではない。また、表裏ともに木炭の痕跡がみられ、木炭と滓が混じり合っている様子から、炉の深さは浅かったと考えられ、小規模な鍛冶炉であったことが想定できる。鉄滓は年代を経るにつれ大きくなることが指摘されており(真鍋2003)、交野市教育委員会の真鍋成史によれば、本資料は大きさが6世紀代のものに近いとのことである。

遺物とともに保管されていた木札には「10号横穴」と記されており、10号横穴墓から出土したものと考えられる。1989年刊行の報告書には「鉄片2点」とあり、そのうちの一つの可能性もあるが、出土状況についての明確な記載はない。10号横穴墓からは7世紀前半の須恵器と8世紀前半の銚帯金具が出土しており、2つの副葬時期が想定されるが、鉄滓については大きさから前者に伴うとみておくのが妥当であろう。(池田)

(4) 銚帯金具(図5-11～16、写真4-26～31、表4)

銚帯金具は鉸具1点、丸軋1点、巡方2点、鉈尾1点、不明金具片1点の計6点である。11～15は「田辺□□」の注記がある。報告書ではほぼ同形の不明金具片が2点報告されていたが、うち1点は現在所在不明となっている。革帯などの有機質や漆塗りの痕跡は肉眼では

確認できなかった。

11は鉸具で、刺金、輪金を欠き、こはぜ形の基部のみ残存する。基部は鍛造の銅板を中央で折り返し、革帯との装着部は別造りの銅鉤で留める。12は丸鞆で、板状の表金具に3つの脚部をもつ。13・14は巡方で、板状の表金具に4つの脚部をもつ。12～14は表金具、裏金具ともに長方形の垂孔をもつ。15は鉈尾で、内側を削りこんだ表金具に3つの脚部をもつ砲弾型を呈す。丸鞆、巡方、鉈尾は表金具を鑄造し、別造りの裏金具で革帯を挟み表金具裏側に鑄出した脚部をかきめて固定したものと考えられる。巡方と丸鞆の裏表両金具の四辺は面取りがなされ、垂孔は切り取った痕跡が残る。16は細片だが、厚さ、断面が台形を呈すことから、丸鞆の裏金具の一部の可能性はある。



写真3 銚帯金具出土状況

(田辺町教育委員会 1989)

表4 堀切10号横穴墓出土銚帯金具計測表

番号	部位	高さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	脚部(本)	備考
11	鉸具	2.1	2.3	5.3	2	基部のみ
12	丸鞆	1.6	2.4	3.3	3	
13	巡方	1.8	2.2	4.8	4	
14	巡方	1.9	2.2	4.2	4	
15	鉈尾	2.3	2.2	6.9	3	
16	—	—	—	0.1	—	丸鞆の一部か

玄室内での出土位置については中軸線より右側から出土しているというほかは不明だが、調査写真から丸鞆、巡方(12～14)は直線上に並び、鉸具(11)もその付近から出土している様子がわかる(写真3)。鉈尾(15)の出土状況は写真から読み取れないが、これら5点は1本の革帯に装着された状態で副葬されたセット関係にある一群と考えられる。丸鞆と巡方(12～14)は垂孔の法量で分類すると大孔に相当し、平城宮・京出土の土器や紀年木簡から初現は8世紀第1四半期に相当する(田中1990、中川2006)。また、田中広明によると大孔をもつ銅製銚帯金具は8世紀第2四半期に出土量がピークになり、それ以降、垂孔は小さく、細長く変化する。鉈尾は田中広明分類のa類(田中2003)に分類され、大孔の丸鞆、巡方と共伴する。9世紀に入ると石帯腰帯具が主流となることから、これらの銚帯金具は8世紀前半から中頃の追葬に伴うものと考えられる。(守田)

4. その他の出土遺物

(1) 堀切古墳群 E26 トレンチ出土遺物 (図6-1、写真5-1)

1978年から1979年にかけての堀切古墳群の調査で鑄造鉄斧が1点出土している。鑄造鉄斧が発掘されたE26トレンチは6号横穴墓の約20m西に設定されたトレンチであり、報告書には「表土の下はすぐ地山になるが、雨水で浸食され溝状になった部分から鉄斧片が出土している」とある(田辺町教育委員会1989:20)。

全長15.5cm、刃幅5.6cm、基部幅6.1cm、残存基部高2.5cm、重さ294.0gをはかる。平面形は中央付近がややすぼまっている。刃部は刃先などが欠損しており、正確な形状は不明である。袋部は表面が裏面よりも短く、側面からみると端部は斜めになっている。袋部の断面形は、端部付近は台形になっており、中央付近は側面がくびれている。

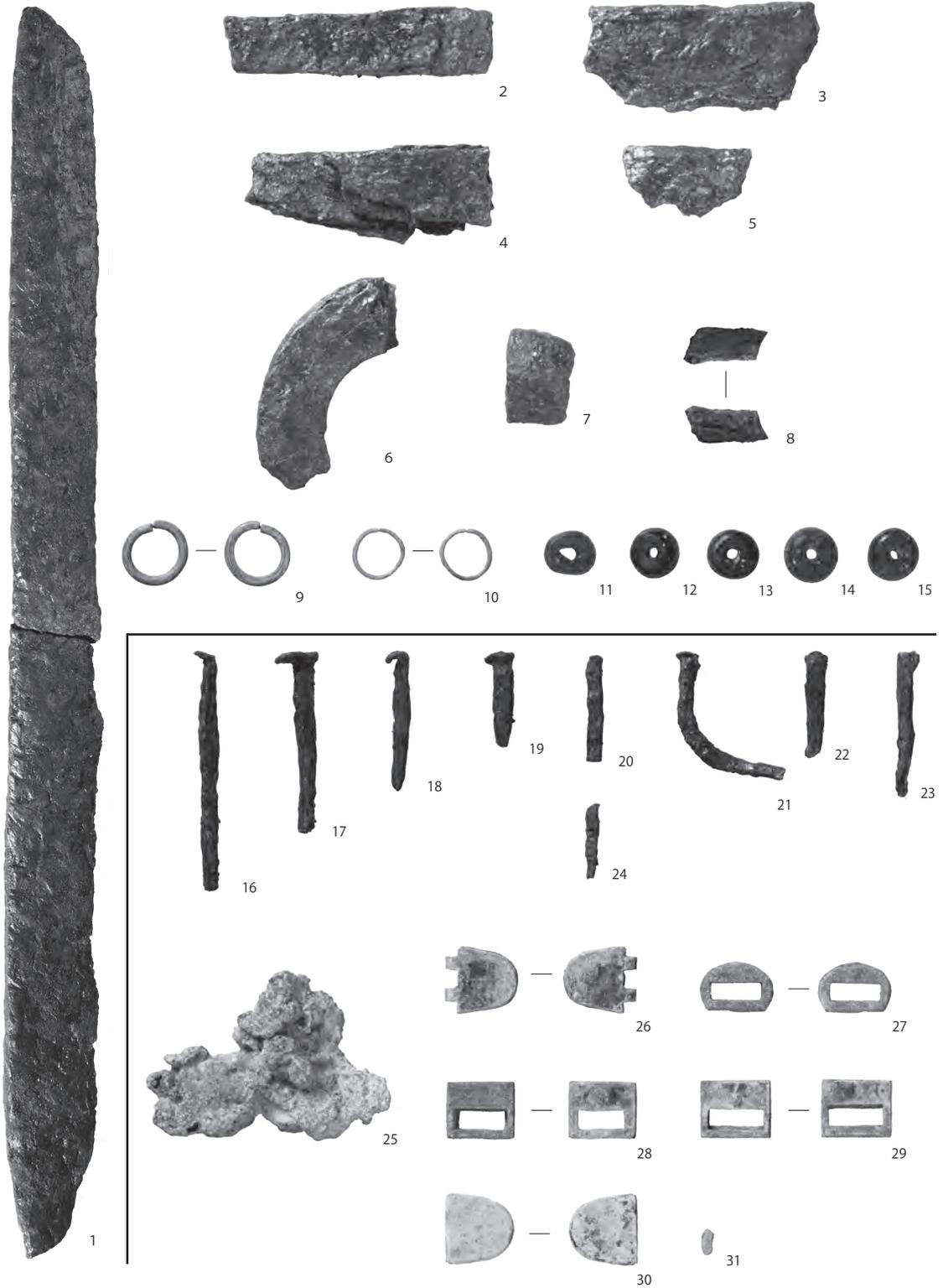


写真4 堀切9号墳、堀切10号横穴墓出土遺物（1～10、16～31はS=1/2、11～15は等倍）

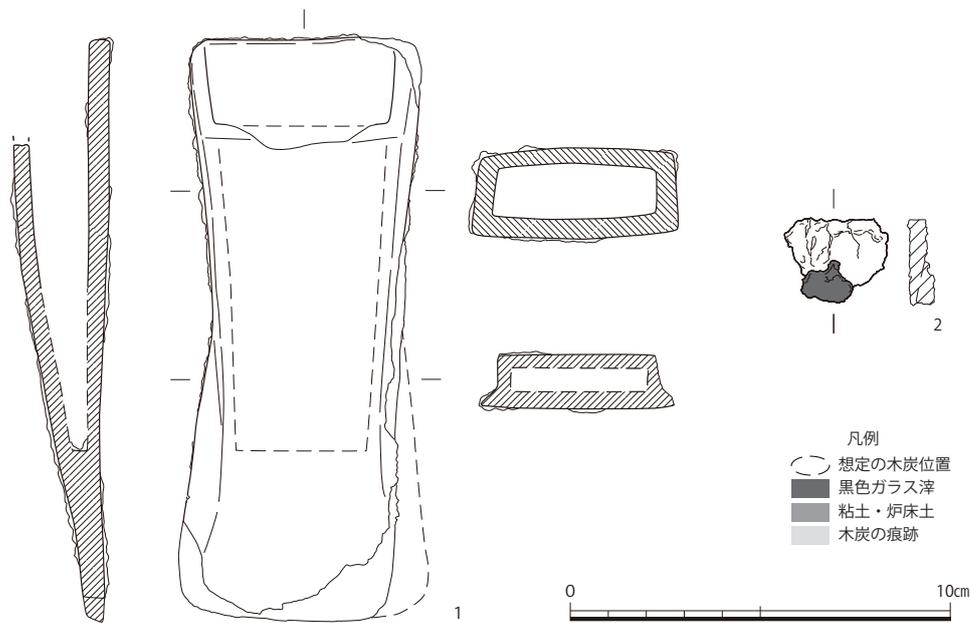


図6 その他の出土遺物 (S=1/2)

E26 トレンチは古墳や横穴墓からやや離れており、加えて尾根の頂上部から出土しているため古墳との関わりが不明であるが、後述のように堀切古墳群と同時期のものと考えられる。

(2) 鉄滓 堀切5号横穴墓? (図6-2)

保存処理の際に付けられたとみられるラベルに「堀切9号墳/横穴5/床面16/54.3.30」と記されている鉄滓が1点確認された。全長2.7cm、重さ3.4gをはかる鉄滓の小片である。炉底の粘土が被熱により固まり、その上に1.4cmの黒色の滓が付着している。

本資料は報告書には記載されておらず、遺物に伴っていたラベルには「堀切9号墳」と「横穴5」の2つの遺構名が記されている。「横

穴5」については堀切5号横穴墓とみられ、9号墳から30mほど北東の位置に所在している。5号横穴墓は1969年に京都府教育委員会によって6号横穴墓とともに調査がなされており、調査報告書によると人骨のほか、7世紀前半の須恵器の杯2点と土師器杯が1点出土したのみで、その他の出土遺物はないとされている(高橋1969)。また、「54.3.30」については昭和54年(1979)3月30日を表していると考えられ、「堀切9号墳」が同じ時期に保存処理が施された堀切古墳群内の他の古墳・横穴墓出土の金属製品のラベルにも記されていることを踏まえると、1979年の調査の際に5号横穴墓から出土した可能性が高い。しかし、1978年から1979年にかけての調査の報告書には5号横穴墓について言及がまったくないため、断定することは難しい。(池田)



写真5 その他の遺構の出土遺物 (S = 1/2)

5. 考察① 鉄滓

(1) 薪遺跡出土事例との比較

堀切古墳群の周辺には多くの古墳群が存在するがそれらに対応するとみられる最も近い集落遺跡が薪遺跡である。甘南備山の北東側に形成された扇状地上に約900m四方にわたって広がっており、縄文時代から近世にかけて人々が活動した痕跡が認められる大規模な複合遺跡である。2007年に京都府埋蔵文化財センターによっておこなわれた薪遺跡の発掘調査では、堀切10号横穴墓から約500m北東の地点で鉄滓が複数出土しており（増田2008）、ここからはそれらについてみていきたい。



図7 堀切古墳群周辺の遺跡

薪遺跡出土の鉄滓は5点確認されており、今回実見できた4点について述べる（図8-1～4）。なお、出土遺構や共伴遺物等は調査報告書（増田2008）に準拠する。1は長軸6.3cm、短軸3.3cm、厚さ1.2cm、重さ31.5gをはかる椀型鍛冶滓である。上面及び下面の一部にはガラス滓が、下面のほぼ全体には炉床土が確認できる。厚さは比較的均一である。この鉄滓が出土したD地区SK01は須恵器と土師器の細片が多量に出土した廃棄土坑で8世紀後半のものと考えられている。砥石や鞆羽口などの鍛冶関連遺物も共伴している。2は報告時に分析のため切断されており、現状で長軸4.7cm、短軸3.7cm、厚さ2.2cm、重さ53.7gをはかる。切断前は長軸6.8cm、短軸3.1cm、重量95.6gであった（大澤・鈴木2008）。現状残存している部分でも欠損している面が多いため、廃棄時はさらに大きいものであったと考えられる。下面には大きな木炭痕が確認できるが上面にはない。表面には5mmほどの石が付着しているものの、炉底の土やガラス滓はほとんどみられない。薪1号墳SD30の上に設けられた溝SD10から出土しており、共伴遺物から8世紀後半ごろのものとみられている。3は長軸3.2cm、短軸2.7cm、厚さ2.3cm、重さ10.9gをはかる。特に小型であり、木炭痕が多く見られる。薪高木2号墳SD70からの出土で7世紀前半の埋葬に伴うものが削平された際に溝に埋まったか、8世紀後半の整地の段階で溝に埋められたものである。4は報告時に分析のため切断されており、現状で残存長軸5.3cm、残存短軸4.3cm、厚さ2.3cm、重さ68.4gをはかる。切断前は長軸7.9cm、短軸4.8cm、重量112.0gであった（大澤・鈴木2008）。薪高木3号墳SD90からの出土で、7世紀前半の埋葬に伴うものが古墳の削平の際に溝に埋まったか、8世紀後半の整地の段階で溝に埋められたと考えられる。

以上、一部古墳に伴う可能性がある鉄滓もみられるが、D地区SK01で8世紀に属する遺物と砥石、鞆羽口が鉄滓とともに出土していることから、少なくとも8世紀には周辺で鍛冶炉を伴う鉄器生産が確実におこなわれていたことがわかる。

鉄滓の成分分析の結果から、薪遺跡では純度の高い鉄素材や廃棄された鉄器を用いた鍛造鍛冶をおこなっていた可能性が高いことが明らかとなっている（大澤・鈴木2008）。大型の鉄滓が確認できていないことも踏まえると、薪遺跡は鉄素材を生産するような大規模な鍛冶工

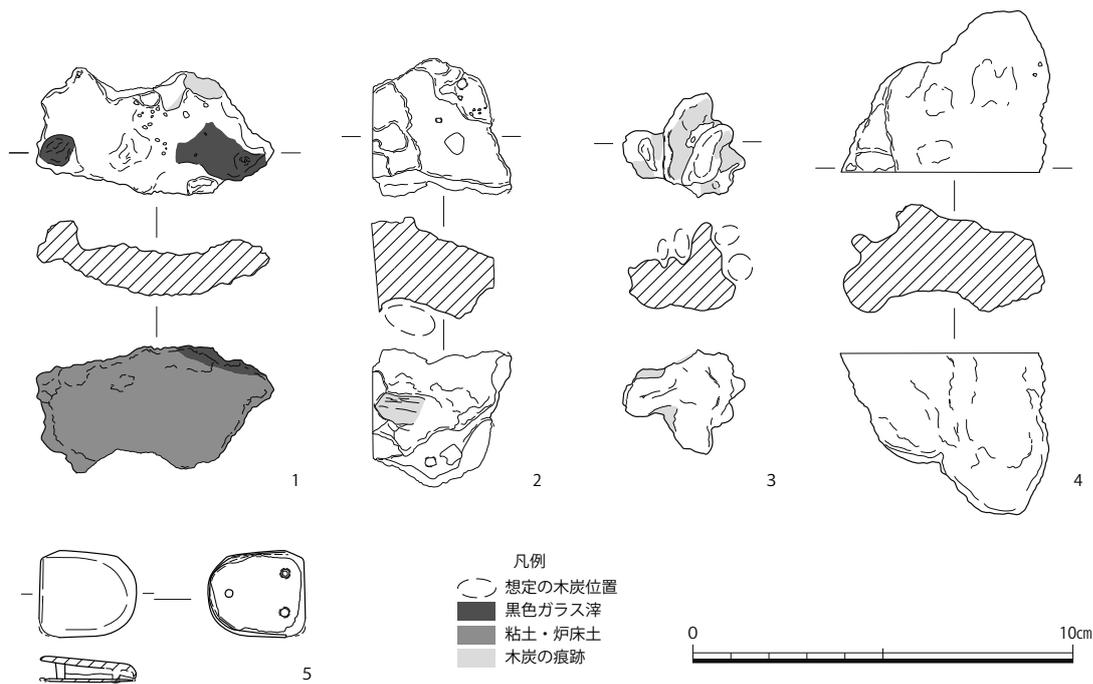


図8 薪遺跡出土遺物 (S=1/2)

房ではなく、鉄素材を鉄器に加工するという最終段階に近い工程をおこなう比較的小規模な鍛冶工房であったと考えられる。

また、薪遺跡出土鉄滓は、堀切10号横穴墓出土鉄滓と比べ、同程度の大きさでも重量があり厚手で厚さが均一なものが多い。これらの鉄滓が生じるような鍛冶炉はより深いもので、より高温の鍛冶がおこなわれていたことが読み取れる。薪遺跡の鉄滓が8世紀代であることを踏まえると、やや技術が未熟な印象を受ける堀切10号横穴墓出土鉄滓はそれより先行するものとみられる。

(2) 堀切古墳群における鉄滓副葬と鉄器生産

堀切10号横穴墓のような鉄滓の副葬古墳は鍛冶遺跡と近接することが多く、鍛冶具副葬古墳とともに被葬者と鉄器生産との強い関わりが想定されており、鉄器生産集団の動向を考える上で重要な役割を果たしてきた(花田2002)。鍛冶関連遺物の副葬は鍛冶具副葬と鉄滓副葬の2つがあげられ、前者は5世紀から6世紀後半までおこなわれ、後者は主に鍛冶具副葬が衰退する6世紀後半以降に活発におこなわれた(村上2007)。このような時期的な差について花田勝広は、鍛冶関連遺物を副葬する被葬者の階級が変化したためと想定している(花田2002)。堀切古墳群周辺においては6世紀後半に築かれた横穴式石室墳である郷土塚4号墳から鍛冶具が(石井1985)、そして7世紀前半の堀切10号横穴墓から鉄滓が出土している状況は上述の理解と整合的である¹⁾。

以上をふまえると堀切古墳群周辺では、薪遺跡で認められる8世紀をさかのぼる、6世紀後半から7世紀前半にすでに鉄器生産がおこなわれていた可能性が高い。今回新たにみつかった堀切10号横穴墓の鉄滓は、すでに知られている郷土塚4号墳の鍛冶具と薪遺跡出土鉄滓との間の時間的間隙を埋める資料であり、当地域の古墳時代から古代にかけての鉄器生産を考える上で非常に重要なものといえよう。(池田)

6. 考察② 銚帯金具

南山城地域における銚帯金具副葬例は城陽市柴山遺跡の9世紀中頃と考えられる木棺直葬の古墓から石製巡方1点が確認されているものの(増田1999)、銅製銚帯金具は例がない。8世紀前半に遡る堀切10号横穴墓の追葬例は、銚帯金具が出現してから初期の埋葬であることや、鉸具から鉸尾まで揃う一本の帯として副葬されているという点でも注目される。また、堀切古墳群の北に位置する薪遺跡でも銚帯金具が出土しており、併せて報告したい。

薪遺跡では、先述の鉄滓と同じD地区SK01より鉸尾が1点出土している(図8-5)。高さ2.3cm、幅2.5cm、重量10.7gをはかり、砲弾型を呈する。裏金具は摩滅しているが、表金具に鑄出された脚部を組み合わせる孔が3か所認められる。内部には有機質に由来すると思われる錆が残り、革帯の可能性が考えられる。10号横穴墓出土の鉸尾とはほぼ同形であり、脚部を3つもつ点、表金具の内側を削りこんで製作する点が共通し、田中広明分類のa類にあたる(田中2003)。鉸尾が出土したD地区SK01は一辺7.1mの隅丸方形の土坑で、検出面上からは細片化した須恵器、土師器、製塩土器、鞆羽口や上述の鉄滓が出土し、それらから8世紀後半を下限とする廃棄土坑と推定されているが(京都府埋蔵文化財調査研究センター2008)、本鉸尾の製作年代については8世紀前半とみてよいだろう。

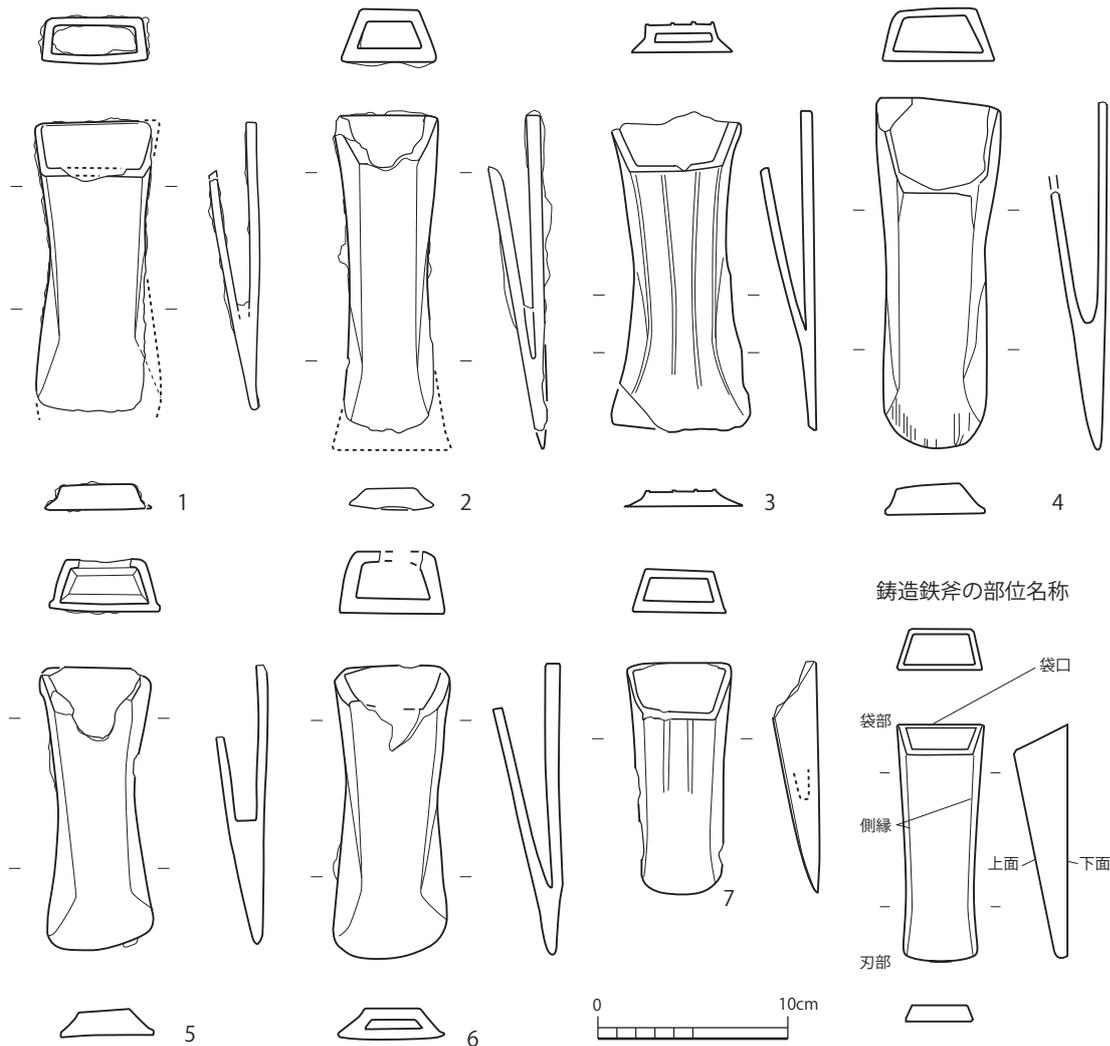
薪遺跡の鉸尾は堀切10号横穴墓出土品とほぼ同時期のものであること、堀切古墳群と薪遺跡でそれぞれ鉸尾が出土していることからみて、8世紀前半の堀切古墳群周辺には少なくとも2人の銚帯所有者が存在した可能性が高い。また、薪遺跡の東方すぐには山陰道・山陽道が敷設され、南東4kmに位置する二又遺跡は山本駅の推定地とされている(鷹野1999)。8世紀前半の当地域に銚帯を保有する2人の人物がいたという事実は、律令制下における当地域の動向を考える上で興味深い。(守田)

7. 考察③ 鑄造鉄斧

(1) 堀切古墳群E26トレンチ出土鑄造鉄斧の型式学的位置づけ

ここからは堀切古墳群のE26トレンチから出土した鑄造鉄斧の検討をおこなう。堀切古墳群の鑄造鉄斧の特徴は大きく5点ある。列挙すると、①身の中央付近でくの字状にくびれる、②袋部断面形が横長の台形を呈する、③刃部断面形が斜辺にくびれのある台形を呈する、④袋口上面が刃部側にせり出す、⑤上面に突帯が鑄出されていない点である(図9-1)。

まず①②③④の特徴は、東潮の分類におけるⅣ型(玉田型)に該当する。Ⅳ型鑄造鉄斧は、玉田M3・4・7号墳など陝川玉田古墳群からの出土を端緒として、金海礼安里49号墳・慶州皇南洞151号墳などに展開し、およそ5世紀末から統一新羅期まで存続する型式とされている(東1999)。ただし、朝鮮半島のⅣ型の鑄造鉄斧は基本的に上面に突帯を有するものが多い。計121点にもおよぶⅣ型鑄造鉄斧の副葬が確認された玉田古墳群のⅣ型鑄造鉄斧もそのほとんどに突帯があり、⑤に挙げた無突帯の類例は、朝鮮半島においては客体的である。一方で、日本列島においては、福岡県山の神古墳や沖ノ島8号遺跡、釜蓋古墳、奈良県寺口千塚15号墳などで①~⑤のすべての属性を満たした類例を認めることができる。日本列島において出土するⅣ型鑄造鉄斧は、袋部断面形の上面幅/下面幅の比率が低いもの(山の神古墳・



1：堀切古墳群 2・3：山の神古墳 4：元岡・桑原遺跡 20次調査 SX001 5：寺口千塚 15号墳
6：釜蓋古墳 7：寺口忍海H 5号墳

1：筆者実測・トレース（京田辺市教育委員会蔵） 2・3：辻田淳一郎編 2015『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室より引用・トレース 4：菅波正人編 2008『元岡・桑原遺跡群 13』福岡市教育委員会より引用・トレース 5：坂崎ほか 1991『寺口千塚古墳群』奈良県教育委員会より引用・トレース 6：東潮 1998『鑄造斧形品をめぐる諸問題』『古代東アジアの鉄と倭』溪水社より引用・トレース 7：千賀久ほか 1988『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会より引用・トレース

図9 鑄造鉄斧の諸例 (S=1/4)

元岡桑原遺跡例など、図9-2・3・4）と高いもの（沖ノ島8号遺跡・釜蓋古墳・寺口千塚15号墳例など、図9-5・6）が存在し、堀切古墳群出土例は後者に位置づけられる。後者の属性は、IV型に後出して出現するV型鑄造鉄斧（寺口忍海H5号墳例など、図9-7）にも共通して認められる。また前者はくびれの屈曲が比較的ゆるやかであり、IV型に先行して2～5世紀にかけて盛行するⅢ型鑄造鉄斧の特徴に類似する。よって、前者から後者への型式学的変化を想定が想定され、堀切古墳群出土例はIV型の中でも後出する型式と考える。寺口千塚15号墳例は相伴する須恵器型式がMT15～TK10型式であり、沖ノ島8号遺跡例はおおよそ後期中葉ごろに位置づけられる。よって堀切古墳群の鑄造鉄斧は古墳時代後期前葉～中葉以降に生産・副葬されたものと考えられる。

(2) 鑄造鉄斧副葬墳としての評価

過去の鑄造鉄斧の集成（長岡・坂 1991、日高 2005）を参照する限り、京都府下における

鑄造鉄斧出土例は、本例に限られる。以下では京都府下においては出土が希少である鑄造鉄斧が、本古墳群から出土した意義について検討をおこないたい²⁾。

日本列島から出土する古墳時代の鑄造鉄斧は、列島内において鑄型が未確認であり、また古墳への副葬も一般的ではないことから、普遍的に鑄造鉄斧の出土が確認できる朝鮮半島からの搬入品として捉えられている（岡崎 1979）。平井勝は、岡山県殿山 6 号墳出土鑄造鉄斧の検討を行うなかで、鑄造鉄斧の出土分布・状況を検討し、古墳への副葬が多く、また主体部外での出土事例が多いことから、「一種の奢侈的色彩」をもち、「各地の小首長が九州の有力首長との交易等を通じて手に入れたもの」と性格づけている（平井 1982：105）。また、千葉県行人台遺跡の鑄造鉄斧の資料報告を行った日高慎も、関東において出土例の少ない鑄造鉄斧が、列島内では類例の少ない多孔式甑などの韓式系土器と伴出する状況などから、渡来系集団や朝鮮半島との交渉を意味する遺物として、鑄造鉄斧を評価している（日高 2005）。

鑄造鉄斧の基本的な機能としては、開墾用具や土木用具（都出 1967 ほか）、タビの刃先（東 1998 ほか）などの可能性が挙げられており、概ねは土堀り具と捉えて良い。他方、先述した希少性から、鉄鋌などと同様に当該期の鉄器生産の鍛冶原料（鉄素材）として使用された可能性も指摘されている（森 1959 ほか）。効率性・経済性の悪さから鉄素材説には懐疑的な意見も存在するものの（村上 2004）、事実として、近畿地方では鍛冶関連遺物を伴う集落遺跡から鑄造鉄斧が出土する事例が多く、集落内でおこなわれた鍛冶と何らかの接点があったものと推測される³⁾（野島 1997・岸本 2008）。このような鍛冶との関係性は、古墳に副葬される鑄造鉄斧でも想定される場合がある。例えば計 3 点の鑄造鉄斧の副葬が確認されている奈良県寺口千塚・忍海古墳群では、寺口忍海 H 16 号墳で鍛冶具の副葬が確認されているほか、古墳群全体で鉄滓の供献が多く認められており、古墳群近傍には古墳時代中～後期にかけて鍛冶操業が認められる脇田遺跡が存在する（真鍋ほか 2020）。また 7 基の古墳から計 10 点の鑄造鉄斧が出土した福岡県金武古墳群吉武 S 群においても、S 8 号墳に供献鉄滓が認められ、鍛冶集団との関わりが想定されている（横山 2003）。

堀切古墳群では、本稿で報告する 10 号横穴墓出土の鉄滓や、堀切 6 号横穴墓の棺内・墓室に敷かれたマツ炭など（本書第Ⅲ部第 6 章）、鍛冶関連遺物が多数認められる。また堀切古墳群の北方には、南山城では唯一の鍛冶具副葬墳である郷土塚 4 号墳が存在する。本墳は TK43 型式期に位置づけられ、鉄鉗・鉄鋌の 2 種の鍛冶具の副葬が認められる。近畿中枢部で鍛冶具を複数種類副葬する古墳は奈良盆地に集中し（加藤 1998）、郷土塚も同地域の鍛冶具副葬との関わりが想定されている（諫早ほか 2022：117）。先述したように、堀切古墳群出土の鑄造鉄斧は寺口千塚 15 号墳出土例と型式学的特徴が近く、郷土塚の鍛冶具と共通した流入背景があったと考えられる。このように、堀切古墳群で鑄造鉄斧が出土した背景には、当該地域に展開していたであろう鍛冶操業との関わりを強く想定できる。（繰納民之）

8. おわりに

ここまで 1978～1979 年の堀切古墳群の調査で出土した遺物、特に金属製品を中心に再検討をおこなってきた。いつものことながら個別資料の再検討に終始した感は否めないが、未報告資料も含め、今日の研究水準のもとに資料を再評価したことにまずは意義を見いだしたい。

ガラス小玉や耳環、銚帯金具については、当時、実施されなかった理化学的手法による材質調査を実施することもできた（本書第Ⅲ部第8章参照）。

それらの地道な基礎調査をふまえて、甘南備山東北麓の群集墳、とりわけ盟主墳を含むとみられる堀切古墳群造営集団の性格について、再考を促す部分がでてきたことも重要である。その最たるものは昨年、6世紀後半に築造された郷土塚4号墳に副葬された鍛冶具の報告の際にも言及した鉄器生産との関りである（諫早ほか2022）。今回、堀切10号横穴墓で7世紀前半のものとみられる鉄滓が出土していたことが明らかとなり、E26トレンチ出土鑄造鉄斧についても全国的な視野での再検討によって、6世紀前半に位置づけられる舶載品で、鉄器生産との関りが色濃く認められることが明らかとなった。6世紀末～7世紀初頭とみられる堀切6号横穴墓から出土した木炭がマツ炭であったことも鉄器生産との関わりで捉える可能性が高い（本書第Ⅲ部第6章参照）。周辺で鍛冶関連遺構がみつかっていない中、古墳出土資料の検討から、8世紀代には確かにおこなわれていたであろう薪遺跡における鉄器生産が、古墳時代後期、すなわち6世紀代にまで遡りうることがいよいよはっきりしてきた。それは、堀切古墳群を嚆矢とする甘南備山東北麓における群集墳の造営開始とおおむね連動し、当初から彼ら・彼女らの生産基盤の一つだったのであろう。

堀切10号横穴墓から出土した銚帯金具の存在は、堀切古墳群造営集団が8世紀前半まで連綿とその力を保持し続けていた可能性を強く示唆するが、このことを明らかにするためには、木津川左岸に位置し、奈良時代には山陰道・山陽道が通る水陸の交通の要衝に営まれた薪遺跡という集落遺跡をタテ軸にすえ、周辺に築かれた古墳の展開を整理し直す必要がある。紙幅も尽きてきたので今後の課題としておきたい。（諫早）

謝辞

本稿を作成するにあたり、交野市教育委員会の真鍋成史氏、京都府埋蔵文化財調査研究センターの筒井崇史氏・伊賀高弘氏、奈良文化財研究所の田村朋美氏には大変お世話になった。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 花田は大規模な首長墳と群集墳の間に、実際の鍛冶生産との距離感の違いがあったと想定している（花田2002）その点においては郷土塚4号墳も堀切10号横穴墓も階級としては低い部類で、被葬者は比較的鍛冶生産に近い人物だったと考えられる。
- 2) 堀切古墳群の鑄造鉄斧は古墳群周辺のトレンチから出土しており、本来古墳の主体部に伴っていたものか、もしくはそれ以外の遺構に伴っていたものか、明確に判別することは難しい。ただし古墳時代の鑄造鉄斧は、金武古墳群吉武S群4号墳や年の神9号墳のように周溝から出土する事例もあり、主体部以外から出土した可能性も十分ありえる。また、集落遺跡の鑄造鉄斧の多くは、後述するように再加工（野島1997）もしくは再利用（村上2004）する目的で集落内に持ち込まれたと考えられるため、袋部片もしくは刃部片の状態である場合が多い（日高2005）。よって、ほぼ完形で出土する堀切古墳の鑄造鉄斧は、何らかの古墳に伴う遺構から出土した可能性が高いと考える。
- 3) 例えば、兵庫県竹万遺跡、大阪府大庭寺遺跡、同府森遺跡、奈良県佐田クノ木遺跡、同県東坊城遺跡などが挙げられる。

参考文献

- 東潮 1998 「鑄造斧形品をめぐる諸問題」『古代東アジアの鉄と倭』 溪水社
- 諫早直人・田口裕貴・菱田哲郎 2021 「京田辺市堀切古墳群の再検討（3）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 諫早直人・池田野々花・守田悠 2022 「京田辺市郷土塚4号墳出土遺物の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 石井清司 1985 「田辺町郷土塚4号墳の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第18号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる—古川登さん退職記念献呈考古学文集—』『いにしへの河をのぼる』制作委員会
- 大澤正己・鈴木瑞穂 2008 「薪遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『京都府遺跡調査報告集』第128冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岡崎敬 1979 「鑄造梯形鉄斧」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
- 岡田大雄・池田野々花 2021 「京田辺市宮ノ口古墳群の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 岡田大雄・上村緑 2021 「京田辺市堀切古墳群の再検討（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 岡林孝作 1995 「木棺系統論—釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ—」『橿原考古学研究所論集』第11号 吉川弘文館
- 加藤俊吾 1998 「鉄製鍛冶具の基礎的分析—古墳時代を中心として（後編）—」『大阪市立博物館紀要』第30号 大阪市立博物館
- 元興寺文化財研究所考古学研究室 1979 『京都府城陽市 上大谷古墳群の調査—発掘調査概要—』
- 岸本道昭 2008 「鑄造鉄斧と鉄器生産」『竹万遺跡』（たつの市文化財調査報告1） 龍野市教育委員会
- 京田辺市教育委員会 2006 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ—薪堀切谷・里ノ内地区宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ—』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第36冊）
- 京田辺市教育委員会 2010 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ—薪堀切谷・里ノ内地区宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第37冊）
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 『京都府遺跡調査概報 第2冊』
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 『女谷・荒坂横穴群』（京都府遺跡調査報告書第34冊） 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014 『京都府遺跡調査報告集』第157冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 京都府立山城郷土資料館 2016 『平成二八年度特別展 山城の二大古墳群—乙訓古墳群と久津川古墳群—』
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566号
- 城陽市教育委員会 2007 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第54集
- 城陽市史編さん委員会 1999 『城陽市史 第三巻』 城陽市役所
- 鷹野一太郎 1999 「二又遺跡」『二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報』 京田辺市教育委員会
- 高橋美久二 1969 「堀切横穴群発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会

- 田口裕貴・岡田大雄 2020「京田辺市堀切古墳群の再検討（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科
- 田中広明 1990「律令時代の身分表象（1）―帯飾具の生産と変遷―」『土曜考古』第15号
- 田中広明 2002「腰金具の変遷と諸問題」『鍔帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 田中広明 2003「腰帯の語る古代の官人社会」『地方の豪族と古代の官人―考古学が解く古代社会の権力構造』柏書房
- 田辺町教育委員会 1989『京都府田辺町 堀切古墳群調査報告書』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集）
- 都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
- 豊島直博 2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通―近畿地方を中心に―」『考古学研究』第48巻第2号 考古学研究会
- 長岡拓也・坂靖 1991「古墳出土の鑄造鉄斧地名表」『寺口千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
- 中川あや 2006「金属器の受容―唐代金属器の入手と模倣生産―」『専門技術と技能』（列島の古代史5）岩波書店
- 奈良県立橿原考古学研究所 1991『寺口千塚古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62冊）
- 野島永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一樣相」『たたら研究』第38号 たたら研究会
- 花田勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人―倭政権の形成と生産組織―』雄山閣
- 日高慎 2005「神戸市行人台遺跡の鑄造鉄斧と多孔式甑」『海と考古学』六一書房
- 平井洸史 2021「古墳時代の和と河内における釘・鋸の消費様相とその背景」『古代学研究』230号 古代学研究会
- 平井勝 1982「鑄造鉄斧」『殿山遺跡・殿山古墳群』（岡山県埋蔵文化財調査報告47）岡山県教育委員会
- 増田孝彦 1999「5. 柴山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査報告集』第89冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦 2008「薪遺跡第8次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第128冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 真鍋成史 2003「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第7巻 小学館
- 真鍋成史・森貴教・織納民之・青柳泰介 2020「脇田遺跡出土の金属器生産関連遺物について」『脇田遺跡の研究 補遺編（その1）』（考古学論攷43号）奈良県立橿原考古学研究所
- 村上恭通 1988「東アジアの二種の鑄造鉄斧をめぐる」『たたら研究』第29号 たたら研究会
- 村上恭通 2004「古墳時代の鉄器生産と社会構造」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 森浩一 1959「古墳出土の鉄鋌」『古代学研究』20・21号 古代学研究会
- 横山邦継編 2003『古武遺跡群 XV』（福岡市埋蔵文化財調査報告書775）福岡市教育委員会
- Oga,K., Tamura,T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods(3th Century BCE-7th Century CE) *Journal of Indian Ocean Archaeology*,9.

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
